



四万十町
町内「ふら〜り」散策

米の川



米 奥地区は、米ノ川地区と川奥地区を併せた地区である。米ノ川は、県道19号から米奥小学校に向かつて橋を渡ったところの集落である。集落の北側は、壱斗俵地区と沈下橋でつながっている。

先月号の壱斗俵の紹介で、南北朝時代である応安年間に、東北の奥州（現在の岩手県）南部「南部鉄器で有名」から来た周防守高忠という人が、現在の壱斗俵地区の田畑を開墾したと記した。また、江戸期の書物に壱斗俵村の近隣に南部村という記載があり、高忠が自身の出身地をとって名付けたとみえるとも書いた。この南部村が米ノ川である。この地域一帯のルーツが現在の岩手県にあり、また、高忠が南部氏と名乗ったことが、窪川周辺に多く見られる「南部姓」の始まりであるということは興味深い。戦国期になり、さらに勢力を拡大した南部氏は、この地区にある小高い山に山城を築き、麓には広大な土居を築いた。これが、現在の米ノ川の「集落」の始まりである。江戸時代中期になると、米の川村だけで、約120世帯、人口は550人に達しようかという規模になる。周辺の村の中では最も大きな村であったようである。

さて、地区には大乘寺という寺があった。1574年に建立された寺で、この寺もまた明治初期の廃仏毀釈の中で廃寺となった。この寺は、日本の多くの寺がそうであったように、



昭和29年までは山の上が米奥小学校の運動場であった。もちろん運動会もここで行われていた。

江戸期においては、地域の子どもの学びの場である寺子屋として機能していた。江戸や大坂、あるいは高知城下とは比較にならないくらい土族が少ないこの地域には、その子息もほんの数えるほどであったろう。それでも寺子屋として機能し続けていたということは、農民の子息の多くも寺子屋に通っていたことを意味する。明治の学制以降、これが地区の小学校に発展していったということは、いかにこの地域が早くから子どもの教育の重要性に気づいていたかがうかがえる。説明するまでもなく、これが現在の米奥小学校である。米奥小学校では、数年前から、文科省が勧めるコミュニケーションスキルに取り組んでいる。地域住民で構成する「学校運営協議会」が学校とともに学校運営に参画するというものである。米奥小学校区住民の子どもの教育への関心の深さは、もしかしたら寺子屋時代から受け継がれたものなのかもしれない。

米ノ川には、現在、62世帯、109人が暮らしている。

		町のうちぎ				四万十川の							
		人口		前月比		出生		死亡		転入		転出	
		男	8,279	2	男	10	15	14	7				
		女	9,247	2	女	3	9	17	9				
		計	17,526	4	計	13	24	31	16				
		世帯数	8,574	-1									
										(12月中の届出)			
		窪川地域 12,331人		大正地域 2,486人		十和地域 2,709人							
												適正值(mg/l)	1月15日
												リン酸	≤ 1.0 測定範囲以下
												硝酸	≤ 0.5 測定範囲以下
												アンモニウム	≤ 5.0 測定範囲以下
												アニオン活性剤	≤ 1.0 0.05
												化学的酸素要求量	≤ 10.0 2.102
												調査：大正（吾川）	
												資料：四万十高校自然環境部	